

## 【外国人の増加と、それに伴う地方自治の変化】

私は、地元である仙台の、外国人への対応について考察しようと思う。

元々仙台は、外国人が少ない都市ではあった。外国人といっても、そのほとんどが中国人で、コンビニやスーパー、デパートなどに行くと、中国語で支払いの方法などが記載されているのが目についた。したがって、中国人への市の対応は進んでいたように思う。

しかし、最近、“東北インターナショナルスクール”（仙台市泉区館）や、“ライゾンインターナショナルスクール”（泉区高森）といった、外国人向けの日本語学校の創設に伴い、東南アジアや西アジア、ラテン系の外国人が増加した。11月に地元に戻った際も、家の向かいに何人かフィリピン人が暮らしていた。また、駅周辺を歩いていて、外国人とすれ違うことが多くなったように思う。

このような変化に対し、仙台市は、外国人のサポートに本格的に力を注ぎ始めた。特に、仙台観光国際協会 SIRA の活動が注目されている。SIRA は、言葉、国籍、文化等の違いにかかわらず、誰もが個性を発揮しながら、いきいきと暮らせる街づくりを目指し、1990年に創立された。SIRA は、国際化事業部ウェブサイトをつくり、そこに、外国人の暮らしに役立つ情報を載せている。SIRA に掲載されている情報は、

- ・外国語での対応が可能な診療所一覧
- ・救急車の呼び方
- ・休日や時間外に診療できる医療機関
- ・健康保険制度の情報
- ・ホームステイ
- ・通訳ガイド
- ・外国語による相談
- ・外国人向けの賃貸マンション、アパートの情報

などである。特に、医療に関するページには、漢字の上にふりがながふってあり、さらに、英語、中国語、韓国語で訳されている。

インターネット以外でも、

- ・留学生の就職活動支援
- ・日本文化体験
- ・日本語講座
- ・日本語弁論大会
- ・生活オリエンテーションの開催

など、具体的なサポートを行っている。

SIRA の活動は、外国人だけでなく、仙台市民にも向けられている。企業に外国人の人材を紹介したり、異文化理解のためのワークショップを行ったり、日本語ボランティアの募集、育成を行ったりと、活動の内容は様々である。SIRA だけが外国人のサポートをするのではなく、市全体が、外国人の住みやすい雰囲気をつくっていかうという狙いである。

仙台は、元々外国人がいるということに抵抗がない都市だからか、現時点では、特に大きな問題もなく、外国人の受け入れが進んでいるように思われる。かといって、まったく改善の余地がないわけではない。例えば、私の身近で実際にあったことだが、ゴミの分別、曜日別廃棄の問題である。町のいたるところに外国人が住んでいるにも関わらず、ゴミの廃棄の仕方の説明には、外国語の記載がないようで、違う曜日に指定と別のものが捨てられていたり、テレビやソファなどの粗大ゴミが置かれたりしていた。指摘する紙が貼られていたが、それも日本語表記のみで、結局外国人には伝わっていないようだった。

また、東日本大震災の際も、外国人が全体の 9 割を占めた避難所があったにも関わらず、外国人の対応が整っていなかったため、外国人たちは不安でうろたえるばかりだったという。

こうした点から、仙台は、外国語表記を、もっと身近な場所にも浸透させるべきである。目立つような場所には増えてきている印象だが、まだ隙がある。実際にその場面になってみなければ気づけないような部分であろうから、これから徐々に改善をしていくことが重要だ。そのためにも、仙台の自治体は、外国人の暮らしに気を配り続けるべきだと考える。